

書評・紹介…張忠義・張曉翔・淮芳『漢傳因明史論』

後藤 康夫

はじめに

中国仏教界における漢訳・漢文文献に基づく因明研究（漢傳の因明研究、なおこの語は後述する）は、一九六六年より一〇年に及ぶ文化大革命^①の一時期中断を夾んで二〇〇年以上の長い歴史を有している。西洋近代仏教の研究方法論等を取り入れ出した明治期の日本に遅れること数十年、古くは清末民初の時期まで遡り、清末から興る唯識学等の仏教活動復興期とも重なっている。因明文献は、当然のこととして大藏経では清以前から各種大藏経に収載されていたり、清でも雍正帝から乾隆帝の時代にかけて作成されて一七三八年（乾隆三年）に完成した勅版漢文大藏経（龍藏・乾隆版大藏経）に収載されていたにも関わらず、既に世間では非常に入手困難になってしまっていた。そのため因明研究の直接的復興は、慈恩大師基（六三二〜六八二）の『因明大疏』等の日本からの逆将来（“回歸”とも称している）及び一八九八年（光緒二十四年）同書の出版流通を契機として、本格的に因明研究が始められており、初期の段階では右記の出版等に貢献をしている楊仁山（文会）（一八三七〜一九一一）や章太炎（一八六九〜一九三六）・歐陽漸〔竟无〕（一八七一〜一九四三）等の在家の仏教学者たちが寄与している。なお、歐陽竟无と言えば、楊仁山の門下生であって、楊仁山の始めた金陵刻經處（仏教經典出版事業）^②を受け継ぎ、江蘇省南京の

支那内学院（内学院と略称）を創設して活動しており、今一人の学生であった太虚（一八八九〜一九四七）を創設者とした湖北省の武昌佛学院（現在、武昌は省都武漢の一地区）（佛学院と略称）との二学院が、中華民國時代の一時期、中国仏教界における指導的な立場にあった。この二学院ではそれぞれ、王恩洋（二八九七〜一九六四）^③と呂澂（一八九六〜一九八九）を内学院の二本柱、史一如（一八七六〜一九二五）と唐大圓（一八九〇〜一九四一）を佛学院太虚の片腕と称される学者たちがいた^④。二学院間では、殊に一九二一、二二年頃より約十年程は、佛学院の史一如と内学院の聶耦耕との間で論式を立てる場合の因明作法の問題、佛学院の唐慧綸と内学院の呂澂との間で釈尊入滅年代の問題、佛学院の太虚と内学院の景昌極との間で唯識教学における認識作用の四分（見分・相分・自証分・証自証分）中の相分別種子有無の問題で活発に論争をしている。

因明研究の蓄積は、時々の政治情勢によって紆余曲折はあるものの爾来百有余年続いて現在に至っている。この近代因明の事情は、張忠義・張曉翔・淮芳編著の『漢傳因明史論』（河北省哲学社会科学規劃項目成果）や鄭偉宏著の『漢傳佛教因明研究』^⑤等においても言及されている。両書とも近年に出版されているもので、中国仏教における因明展開史を概括的に述べており、外国人にとっても参照に足る書籍と言える。これらは決して新刊ではないものの近年出版された中ではよくまとめられており、一冊で中国因明研究の現在までの概況が体系的に理解できる好著であって、東アジア・中国の因明を理解する一助となる一書であろう。そこで、右記の二書の中から後に出版されている方の張忠義・張曉翔・淮芳編著の『漢傳因明史論』（甘肅民族出版社 二〇一〇年十二月）^⑥について聊か紹介しておきたいと思う次第である。一冊で中国因明研究が体系的に理解できる著作であるため、まずは紹介に先立ち各項目を担当した人々を含め著者や関係する人たちの出版努力に対し心より敬意を表しておきたい。

なお、読み手の便を考慮して原文にはない文章（説明文）や註記、所々に「評者附加」と称する文を加えている。また、中国語文献及び著者等の原文の簡体字使用は避け、日本語と共通しない文字は正字を使用することとして、日本語文献と区別をしておくこととする。さらに、本稿では原文の書籍の性質上、中国仏教におけるインド論理学等インド因明研究には言及しないことも併せて附言しておく。

一

書名に使われている「漢傳」とは中国へ伝来して来たことやその文献等をさすわけであるが、伝来後中国の地で発展してきたものも含むために「漢傳」に「佛教」を加えた「漢傳佛教」と言えば漢訳・漢文文献を中心とした中国仏教と言いつ換えることは可能である。なお「漢傳」に対しては別に「藏傳」と言う言葉があり、こちらはチベットへの伝来をさして、両伝では明確に漢語^⑦文献とチベット語文献とで区別されている。その「漢傳」における因明学分野が本書である。

文革後、再び始まった一九八〇年代以降の因明研究は、漢文因明典籍の研究そのものと西洋論理学との関係等が考究され、今日に至るまで続いている。そういう中で、因明研究が陸統とつづく状況^⑧での本書上梓を藩劍英（華東師範大学）氏が玄奘の詩とされる「孤峰絶頂万余嶂。策仗攀萝漸渐登。行到目辺天上寺。白雲早伴二三僧」を引用しながら序文を寄せていることは示唆に富むものである。志し高き若い因明研究者に対し「白雲早伴二三僧」にかけて声援をおくことは、研究の頂上をめざし登攀する研究者への惜しめない期待であろう。まさに本書は上述編著者三人だけで成ったものではなく、後記によれば数多くの人が執筆しており、そこに明確に文責を伴う執筆箇所と名前を記し^⑨て、因明研究に関わる多く

人たちの編著の成果であることを示している。

本書は六章構成で、中国への伝来から広く伝播していく時期、衰退時期、復活時期、発展時期と言うように伝来萌芽期から現代までの時間軸に沿って記し、最終章に因明と論理学との関係を述べている。この伝来・発揚・衰退・復活・発展の見方は中国における因明展開のすがたとして認識されていることを反映している。

まず本書の目次構成を挙げれば次の通りである。

目録

第一章	萌芽期—古因明的傳播	1
第一節	古因明傳播史—漢傳古因明概述	1
第二節	古因明理論研究評介—几部漢傳古因明著作簡介	11
第三節	漢傳古因明与《文心雕龍》的關係	24
第二章	弘傳期—唐代的因明	32
第一節	唐代因明傳播史	32
第二節	唐代因明傳播主要人物簡介	39
第三節	唐代因明的東漸—東傳至新羅、日本等地的因明	107
第三章	湮没期—宋明時期的因明	116
第一節	宋明時期因明傳播史	116
第二節	宋明時期人物簡介	123

第四章 復蘇期―二〇世紀的因明

第一節 二〇世紀因明傳播史

第二節 二〇世紀因明傳播主要人物簡介

第五章 發展期―二一世紀初的因明

第一節 二一世紀初因明傳播史

第二節 二一世紀初因明傳播主要人物簡介

第六章 論因明的性質与對象

第一節 因明可以劃歸爲邏輯

第二節 因明不可化歸爲邏輯

参考文献

後記

以上右記原文のままでも十分読み取ることができるとは、強いて贅言ながら日本語に訳しておく
と以下の通りとなる。

目次

第一章	萌芽期―古因明の伝播	1
第一節	古因明伝播史―中国へ伝来した古因明の概略	1
第二節	古因明の理論研究への評価―中国へ伝来した古因明の著作紹介	11

第二節	二一世紀初因明傳播主要人物簡介	224
第六章	論因明的性質与對象	234
第一節	因明可以劃歸爲邏輯	234
第二節	因明不可化歸爲邏輯	237
参考文献		239
後記		243

	第三節	中国へ伝来した古因明と『文心雕龍』の関係	24
	第二章	弘伝期―唐代の因明	32
	第一節	唐代の因明伝播史	32
	第二節	唐代因明伝播の主要人物紹介	39
	第三節	唐代因明の東漸―新羅、日本等へ東伝する因明	107
	第三章	埋没期―宋明時期の因明	116
	第一節	宋明時期の因明伝播史	116
	第二節	宋明時期の人物紹介	123
	第四章	復活期―二〇世紀の因明	140
	第一節	二〇世紀因明伝播史	140
	第二節	二〇世紀因明伝播の主要人物紹介	159
	第五章	発展期―二一世紀初頭の因明	214
	第一節	二一世紀初頭の因明伝播史	214
	第二節	二一世紀初頭因明伝播の主要人物紹介	224
	第六章	因明の性質と対象を論じる	234
	第一節	因明は論理学に編入できる	234
	第二節	因明は論理学に編入できない	237
	参考文献		239
	後記		243

このような時間軸上の記述は、仏教研究書に関わらず所謂「通史」という形で上梓されることが比較的多いものの、全体像を叙述する上では極めて有効な描き方である。ただ、評者から見てこれは大きく二つに区分されよう。第一章から第三章までは伝来期から宋明期までの因明関係の僧侶を記しており、一般的に因明学展開を対象とする研究叙述にあたる。一方、第六章を除く第四章以降は近現代の因明研究者の事跡等を記しており、一般的に研究者の事跡・歴史等を記す学界史や研究史等に相当するであろう。日本の唯識研究^⑧に置き換えれば、言うなれば玄奘・基・慧沼・智周等の中国僧から善珠・真興・貞慶・良遍・基辨等の日本僧の教学研究及び南條文雄・佐伯旭雅の明治期より宇井白壽・深浦正文・富貴原章信・結城令聞・武邑尚邦等々各氏の事跡を一冊の書籍で閲読する感覚を得るものである。しかし、この感覚はおそらく著者たちは意識していないのかも知れない。何れにしろ、ここにもまた伝来期から現代までをひとまとまりにして記す中国での叙述方法の一端を垣間見られるものである。

さて、インドでの宗（主張）因（理由）喩（喩例）合（適合）結（結論）の五支作法から宗因喩の三支作法への因明論式を変更した陳那（四八〇～五四〇頃）を境としてそれ以前の古因明と以降の新因明とに区分されるために、まず古因明が伝来したとする。これが第一章「萌芽期―古因明の伝播」で中国への古因明の伝播を述べている。第一節「古因明伝播史―中国へ伝来した古因明の概略」では伝来状況、第二節「古因明の理論研究への評価―中国へ伝来した古因明の著作紹介」では『方便心論』^⑨『順中論』『如実論』『瑜伽師地論』『大乘阿毘達磨集論』『顕揚聖教論』の紹介、第三節「中国へ伝来した古因明と『文心雕龍』の関係」では劉勰の『文心雕龍』への影響を述べている。わたしたちが最初に疑問を持つのが、古因明は何時頃中国へ伝来したのかと言うことである。これに対して、第一節には最古の古因明の伝来を南北朝時

代、劉宋代に慧嚴（三六三〜四四三）・慧觀・謝靈運（三八五〜四三三）により曇無讖（二二八五〜四三三）訳『大般涅槃經』（北本）を【法顯（二三九？〜四二〇？）・仏駄跋陀羅（三五九〜四二九）訳『大般涅槃經』を参照しつつ、「評者附加】改編した『大般涅槃經』（南本）に古因明の論証方法が含まれているとして、最初期に位置付けている。実質的に最初の古因明文獻としては『方便心論』（吉迦夜・曇曜共訳）、及び龍樹の『廻諍論』（毘目智仙・瞿曇流支共訳）・『順中論』（瞿曇流支）を挙げ、『決定藏論』・世親の『思澤論』・『如実論』（真谛訳）等々を示している。ここでは南北朝時代を中心とした因明関連文獻の伝来状況を記しつつ広く伝播しなかった理由として次の五つを挙げている。

（一）古因明の著作及び知識そのものが弘伝に不利な要因が存在している。（二）情報伝達としての仏教諸派の栄枯盛衰が伝来した古因明の命運に影響している。（三）今後も成熟した翻訳紹介をしなければならぬ。（四）相対的に狭い伝播と研究範囲。（五）流動的な社会歴史状況。この五つを挙げていることは古因明が南北朝期の仏教界への影響の小ささという点で理解し易いことができるものである。これを評者が区分すると内在的要因としては（一）（三）、外在的要因としては（二）（四）（五）となる。即ち（一）では古因明理解という点では難解さがある点を示し、一例として『方便心論』『明造論品』での八種の論法を説く中にはその八種の中で誤解を誘発する恐れがある等を挙げている。論理構造の難しさを見ていることになる。（二）では漢訳者の能力に直結するもので、漢訳の系統性と統一性に欠ける点や同一概念に対して異なる解釈と論証等から古因明の理解が困難であったこと。一方、（二）では古因明の知識伝播・発展の伝達の場合が仏教諸派であるために、その仏教諸派が栄えたり衰えたり、亦は王朝の廃仏政策に左右されるということ。（四）では古因明の翻訳紹介及び伝播は寺院を中心として行われており、社会への影響のない点、たとえ寺院内でも広く論争等に活用されておらず、研究する人々の少なさ、亦広範な地域で

の發展機会がなかった等々、社会等との関わりのないということ。(五)では当時の頻繁な王朝交替と戦乱の状況下にあったということ。このような理由付けをしている点は十分参考になる見解である。ただ第一節では、最も早いインド因明関連文献の伝来について『大般涅槃經』(南本)としながらもこの經典について本節及び後節の文献紹介の箇所でも触れておらず、「最早」とするだけにその内容に全く言及していない点は惜しまれる。

第三節では中国書籍が因明の影響を受けている点を挙げている。このように見ることは既に、われわれにとっても十分注目してよい見解である。劉宋代、劉勰^①のレトリック等文学理論の書『文心雕龍』^②には因明の論証方法及び因明における過失規定の影響が認められると指摘していることである。前者では、一般的に儒学書はたとえ命題を提示してもその論証までは行わないのに対して、仏教書は概ね論証を行っているというその点の影響を得て証明作業をしていると言っているのであって、『文心雕龍』は因明の影響を受けることで論証を試みているとする。具体的には数点取り上げており、幾つか挙げると、(一)「原道」(文学原理)において設問形式によって「文之爲徳也大」の論点を提示して、すぐに天文・人文は「自然の道」「文」であるという重要性を論証することと結びつき、上古の「人文一言」はどのように「自然の道」に符合するのか、これらが仏教の〈宗因喻〉の式と符合することによって推理の緊密性と反駁の余地を留めるという特色を明示している。以後各編において理によって例に到る方法等が用いられているとされている。(二)亦古因明の論式を用いる点は『方便心論』の〈言失〉〈語多〉〈義重〉を援用することであり、更に「正理」「般若」等『方便心論』等の仏教語句を連用すると言う肯定的用法は仏教教理と密接な関係のある古因明の援用とするのである。(三)譬喩について『方便心論』における八種の論理主題の第一の〈喩〉―実例を挙げて譬喩を作り論題を証明する方法、これが『文心雕龍』の譬喩を用いる論証方法

と同様であると言うのである。一例として喩でも肯定の喩・同類喩として、「文才」と天地とが並存を証す場合には、宇宙・動物・植物を譬喩として論証を示すそのような事物を証することも各々「文才」の異なった表現方法であると見ている。このような比喩法はそれまでの儒学書と比べても描写性が多くを占め煌びやかで美しく音楽美を伴い動きが強いといった宗教文学の典型的特徴であって、これこそが「齊梁仏教界の慣用文章法」であると認じている。(四) 聖教量について、論理主題第五の〈知因〉の中の〈隨經書〉(聖言量)は仏教における經典文による証明に相当するために、『文心雕龍』では「文」は自然の道にはじまり儒家經典は人文の始りであるため、聖人のことば所謂儒学經典が文章の優劣を評価する重要な指標となると述べるのである。即ち、ここは仏典における經論文教証を儒学經典文に置き換えていることになる。

因明の過失規定との関係については、『文心雕龍』はその因明の〈過〉の影響を受けていると言うのである。これは『方便心論』に言及する謬誤(墮負処・立論者の主張の敗北)―〈似因〉〈言失〉(ことばが理に乖く)等が『文心雕龍』にも示されている。誤った理由根拠による論証というその点を取って、不完全な知覚から誤った推理や比較をするものなので、『經書』の中で斷章取義して成立させることがそのような誤りを齎すことになるとしている。他にも、もともと疑問視される『緯書』に対しては『經書』と協調しない・聖訓等と適応しない・天命の要求と符合しない等々から後世の作であると論じたり(「正緯」)、『史記』記載の引用文に現れる錯誤を分析している。亦「誇飾」では文学とは真实性を重視すべきで客觀的事実に違背することに否定的であるため、文学作品は適度の誇張は認められても事実に違反することは完全にはできない等、総じて論拠に真实性が失われている・理由が不十分であるという誤りが認められるそのことが『方便心論』の〈似因〉(主張のための根拠が成立しない)に相当すると言うのである。

この二点から『文心雕龍』へは作品理論の解明と論証方法において影響を受けていると断定している。劉勰の時代にはまだ系統だった完全な古因明理論は掌握できていないが、創作実践の中で古因明の方法運用は可能であったとし、『文心雕龍』創作に古因明の要素があることは否定できないという見解が示されている。

この関係について詳細な論述は本書の性格上無理な相談であろうが、それでも更に具体例を提示しつつ内奥に迫ることがあってもよかったのではないかと思う人もいるであろう。しかし、初期中国因明史上『文心雕龍』と因明との関係性を論じていることは、大いに参考になるものであろう。

二

新因明の伝来は、玄奘の漢訳を嚆矢とする。その玄奘によって齎された因明は第二章「弘伝期―唐代の因明」において述べている。この章では第一節「唐代の因明伝播史」で因明の伝来状況、第二節「唐代因明伝播の主要人物紹介」では玄奘・基・神泰・慧沼・文軌・呂才・文備・明覚・定賓・玄応・普光・鑒法師・義浄・智周の紹介、第三節「唐代因明の東漸―新羅、日本等へ東伝する因明」では新羅・日本の状況紹介を行っている。

第一節では玄奘帰国後の因明典籍翻訳事情に触れながら中国因明史上「僧俗の争い」と称されている呂才（六〇〇～六六五）との確執に言及している。事の発端は呂才が神泰の『因明正理門論述記』、『因明入正理論述記』・靖邁の『因明入正理論疏』^⑤及び明覚の義疏^⑥を手に入れて後、自ら「彼らの書は」執見によって誤っている。所説は矛盾している。……仏は一音によって説き示しているから……僧侶以外の者

を除く必要はない。私は公務以外の時間に註釈を施した¹⁷⁾と序文に記す『因明注解立破義図』¹⁸⁾を著している。このことを慧立は、呂才は仏門の者でない点、神泰等三人の解釈を剽窃したとする点、異端を述べている点、名譽を求めている点等から厳しく糾弾している。双方をそれぞれ支援する人たちまで集まりやがて時の皇帝太宗への上奏にまで事が及び、ついに勅により玄奘に呂才へ問い質させるまでに至ったという騒動である。既に玄奘在世中から正統な因明の護持に腐心していた状況が窺える事件であろう。このようなことは日本では案外知られていない事情であり、事実関係を知るだけでも参考に供されるものである。

ところで具体的な因明事情は第二節で紹介されており、玄奘を初めとして計一四名について述べている。1) まずその玄奘は漢訳については二、三点取り上げている。まず玄奘訳の因明專著、陳那(四八〇〜五四〇頃)の『因明正理門論』(『理門論』と略称)と商羯羅主(五〇〇〜五六〇頃)の『因明入正理論』(『入正理論』と略称)の書名について「因明」の二語が加上されている点である。その理由として次の点を挙げている。(一)因果の繋がりを明確にする「正しい理論」で、これは事物と現象との因果関係についてどのように正しい理論を明確にするのかの全く新しい研究であり、推理形式と規則を講じている理論である。(二)因明は陳那を以て時代を画して古新を分かすが、玄奘は「因明」の語を加えることで古因明との区別をしている。(三)「明因」¹⁹⁾の重要性を説明するためである。と説示している。特に(一)の因果関係の重視とは、因明論式中の〈因〉との混淆に注意して、あくまでも因縁の関係によって万物を理解し万物変遷の過程こそが因果の論証であり因果の推理であると見ている点にある。次に巫白慧氏教示により「因の三相」についての訳語に言及している。第一相〈遍是宗法性〉と第三相〈異品遍無性〉及び第二相〈同品定有性〉の「遍」と「定」の各語を附加している点である。これは既に第二相・第三相には限定詞の“eva”をつけて「定」と「遍」を訳している

と見なされているが、ここではその二字の違いに話が及んでいる。即ち〈同品遍有性〉と訳さない点について、九句因と絡めて説いているのである。九句因が〈因〉と〈同品・異品〉との成不成関係に九種を数えるために、それを用いて〈因〉と〈同品〉の関係から〈同品〉に存在する・存在しない・一部存在するに分けられる。これは〈因〉に存在することが“PAM”（一部のPはMではないことを否定する）、〈因〉に存在しないことが“PEM”（一部のPはMであることを否定する）と言うこととなることから、「定有性」とは一部分の〈宗同品〉は必ず〈所作性〉因の性質を備えていることをさしていると言うのである。即ち九句因の第二句因があらゆる〈同品〉に〈因〉が存在するにもかかわらず、第八句因の、ある〈同品〉に〈因〉が存在し、ある〈同品〉に〈因〉が存在しないことによって、〈同品〉には「確実に」〈因〉が存在することを保証していることにある。換言すれば一部の〈同品〉には必然的に〈因〉が存在することを求めており存在しないことはあり得ないわけで、〈同品定有性〉は「必ず存在する」(定有) — 一部分に存在する — であって「あまねく存在する」(遍有)を求めていると言っわけである。これは〈同品〉から〈因〉との関係を捉えていることになる。それでは反対に〈因〉から〈同品〉との関係を見ると、あらゆる〈因〉は〈同品〉の性質を求めること(“MAP”)であるとする。この二つは、前者が「存在する」という基礎の上に「真包含」関係性を排除する — 一分のPはMであることを確立すること。後者は第二・八句因の抽象概念を通じて交叉関係を排除して「真包含」関係を確定する — “MAP” — と言う二種の観点があると言っているのである。ここは「定」を加えることで「有」を強調し且つ一部の〈同品〉に〈因〉の性質が有ること、つまりあらゆる〈因〉は〈宗同品〉であるという。換言すれば「定」字を用いることで「一分のPはMである」を「真包含」とする関係を確定していると言うことは「有」字に包含する意味を確定し、因明と

違背する数種の誤りを排除しているというように玄奘が考察していたと言うのである。このようなことからこの一字は値千金であると述べている。ここは十分に玄奘の因明理解を探るポイントの一つとなる点であろう。

しかし、本節ではこのように縷々述べながらも、最後に、玄奘は「定」字を加えるのに必ずしもそのような多くのことを考慮していないが、客観的にみてこのような作用を齎しているのであるという理解に至っていると結んでいる。この最後の一節には「私たちは現在また新しい理解がある」と註記している。上記の叙述について一定の説得力を持つものであると理解できるだけに、これは更なる詳細が強く求められるところである。

これ以外には現代論理学に関係付けて述べたり、『正理門論』のサンスクリット原本に関して李学竹氏考証のチベット・ポタラ宮でのサンスクリット原本の発見に触れたり²⁰、現存する『入正理論』のサンスクリット原本について五カ所の加筆削除の論理傾向、『入正理論』漢訳での「似異法喩」の語順変更等に言及している。この中では、上述との関係から以下のことに触れておきたい。原文に比べて「因の三相」における「定」「遍」二字の増補、「此中所作性或勤勇無間所發性、遍是宗法、于同品定有、于異品遍無、是无常等因」²¹の原文には「定」と「遍」の言葉の意味を存していないという点である。ここでは三相不同の論理的はたらきによって訳し分けていて「定」は「一定」（必ずの意）「必定」（必ずの意）のことで、「必然的」を意味しており、「遍」の真意はあらゆる可能性を究めていて帰納論理から講じると「遍無」は「全部無」「無一」（ひとつもないの意）で、これも「必然」であるとして、玄奘の演繹的論理傾向が見て取れる（巫白慧氏の見解）とも先述とやや視点の異なる見解も述べている点にある。ここでは語られていないが二字について複数の見解を認める見解を有してい

ると理解できよう。そうであればこそ尚更先述の「新しい理解」の具体像が必要になるものと思われ、今後に大いに期待するところである。

これ以降は玄奘漢訳因明書への一三名の註釈者たちの見解を紹介している。本書の掲載順に従い一瞥しておく、

2) 基の特徴としては(一)因明を概して論じている(神泰・文備・文軌・靖邁の四釈を基礎とし自己の見解を述べる等)。(二)体の三名・義の三名を概括している(《宗》の《前陳》(主辞)と《後陳》(賓辞)を体と義と言うが、前者に《自性》・《有法》・《所別》、後者に《差別》・《法》・《能別》の各々三名があり、それぞれの関係を述べる)。(三)厳格に《宗依》・《宗体》を区別している(《宗依》とは《宗》の《前陳》と《後陳》をさし、二つの《宗依》は接続詞等を用いて《宗体》を構成している。立論対論者は共に認める《宗依》と共に認め合わない《宗体》によって対論が行える点を述べる)。(四)過失論を整理している(三三過失)。(五)簡別語の使用方法を決定している(唯識比量等の比量)。という五項目を示している。(五)に関連して『因明大疏』には《真能立》・《似能立》・《真能破》・《似能破》の四種間の同異関係は《自比量》・《他比量》・《共比量》の三比量論に基づいて判定しているが、一部の偏り誤りからは免れ難く以下の難点が指摘されている。「為他比量」の「唯悟他」の本義を正確に解釈していない、《似能破》の解釈は不正確である、《似能破》の対象は必ずしも《真能立》とは限らず二者の関係は混淆している、《似能破》の対象は《似能立》たり得る、《有法》と《法》とについて相互区別を否定すると《自語相違》となる(《法》を用いて《有法》を区別することはできるが《有法》を用いて《法》を区別することはできない、「差別性故」を積して一切の《有法》と《法》とは相互区別できるといふ点をさしている)等々を挙げている。

3) 神泰については、彼の『因明正理門論述記』に基づき、(一) 論題の説明(「正理」とは諸法の正理をさし方便門に趣入すること、『理門論』は『集量論』への入門知識・基礎と捉える)。(二) 論文を解釈する(一『正理門論』の意義説明・過を非過・非過を過とする混乱を是正、二 四種の「宗」説明・共所許宗・本所習宗・義唯宗・隨自意宗、三 九句因の説明・〈因〉とは「遍宗法性の因」(宗有法の法)から説明、四〈宗〉〈因〉の寛狭と〈共不定〉〈不共不定〉の説明・寛宗狭宗・寛因狹因と二不定との関係、五〈喻〉との合離を説明・〈合〉(結合)〈離〉(隔離)と〈喻〉を同一視し〈合〉を〈同喻〉〈離〉を〈異喻〉等と説く)の二点から註釈書の特徴を述べている。

4) 慧沼(六五〇〜七一四)²⁸の特徴としては、(一) 因明への見方(因明の使用範囲・因明の工具性の説明、因明のはたらき・因明の立破説明、因明の地位、因明論式の発展・因明論式の発展過程と個人への貢献への評価)、(二)〈能立〉〈所立〉の説明(〈能立〉〈所立〉の三積・〈宗〉という所詮釈には〈所立〉の意味が含まれている。自性差別の教・理は〈所立〉。自性差別の所依に包含される意味は〈所立〉)。(三)〈喻〉の説明(〈異喻〉のはたらきと〈異喻依〉の重要性を指摘)、(四)「差別為性」と「差別性故」(慧沼は「差別性故」を支持し「差別為性」に変更する呂才・文軌を批判)、(五)闕支過(闕支過の分析)、(六)『因明入正理論義纂要』による分析―〈有法〉及び〈法〉における〈有法不成〉―(〈有法〉をもって〈有法を成立させると〈両俱所依不成過〉に陥り〈有法〉をもって〈法〉を成立させると〈両俱不成過〉〈相符過〉に陥る等の説明)。

5) 文軌については、『因明入正理論莊嚴疏』(『莊嚴疏』と略称)に基づき、以下の説明をしている。

(一) 自序(一) 因明の性質・内明は信奉する人が行い因明は信じない人が行うもので、因明を行う者は内明を信奉しているため、文軌は因明とは「悟他門」が重要で誹謗者にこちらの信奉する内明を

信じさせるために使用する工具であるとする・『莊嚴疏』作成動機…当時因明論書は尊重されず語句も混淆し論争の時にも是非を確定する方法がない結果になる・因明の効用…学説が正当であるかどうかを確定し学問を修める環境の中で重要なしである)、(二)〈宗〉と〈能立〉〈所立〉の説明(〈宗〉は〈所立〉〈因〉〈喻〉は〈能立〉で、〈能立〉は〈所立〉を成立させるため等の陳那の所説解(積)、(三)〈同品〉〈異品〉の説明(〈同品〉〈異品〉の解釈に関して「体」なのか「義」なのかにつき「体」にして「義」ではないという見解)、(四)「因の三相」説明(〈遍是宗法性〉…「遍」は〈宗有法〉、「宗法」即ち〈因法〉は〈宗有法〉の〈法〉、あらゆる〈宗有法〉は〈因法〉の性質を具有している・〈同品定有性〉…〈宗法〉の性質を持つ〈有法〉は〈因法〉の性質を有す・〈異品遍無性〉…〈宗有法〉を除き〈宗法〉の性質を持たない〈有法〉は〈因法〉の性質を有さない)、(五)〈同喻〉〈異喻〉の説明(〈同法喻〉…〈因法〉〈宗法〉を有す・〈異法喻〉…〈宗法〉の〈有法〉及び〈因法〉の性質を有さない)。(六)「一四過類の分析解釈」(立論者には過失はなく対論者には過失がある・立論者には過失がなく対論者には別の過失を齎す)。

6) 呂才については、(一)因明の性質(註釈を著す僧侶たちは内明を学ぶための因明とみるのに対し、彼は因明の工具性の重要さへの認識を持つ)、(二)因明への注解(因明理論に易学を加えて変更し初学者にも便利に利用でき理解しやすくしている)、(三)因明の矛盾箇所を提示(神泰・靖邁・明覺の解釈の相違及び玄奘の漢訳と理解への疑問「〈有法〉と〈法〉との相互差別は自相矛盾している」)、(四)因明述悟に関する認識(「因明」の「因」には多くの意味概念を有するべきでないとして疑問を提示。但し明常により意味の狭義と広義の混乱がみられ「執一体而亡二義」と批判されている旨)、(五)玄奘翻訳への疑問(「差別故性」を「差別為性」へ改めている点。この点では中国学界では翻訳

は不正確とする呂澂氏の説と翻訳は正確無謬とする韓廷傑氏の説の二つを紹介)、(六) 合理的改善意見(「喩体喩依、去体隆依而為喩」『還述頌』²⁸⁾は、一〈喩〉は譬喩の意味、二 玄奘伝来の因明に合致、三 陳那の因明変更の不徹底さを示す)と指摘。都合、工具性・初学入門者への利便性・自相矛盾の提示・因明術語の問題・玄奘翻訳への疑問・因明への改善意見・勝論派の特徴を『易伝』の太極と関係付ける説明により、世界の物質起源を示すという諸点から中国論理学の発展に貢献していると積極的に評価している。

- 7) 文備については、「因体」の有無は表詮と遮詮によると言う藩劍英氏の説を紹介。
- 8) 明覚は『明覚禪師語録』等著作の紹介。
- 9) 定賓は入唐僧栄叟・普照への具足戒授戒や著作の紹介。
- 10) 玄奘については、彼の『正理門論疏』に〈所立法〉と均等義品を〈同品〉とする場合の帰納の四視点(一 莊嚴軌公意〔文軌の積〕〈宗〉を除いて全ての〈有法〉は義品、二 卞固壁公意〔壁法師の積〕〈宗〉を除いて全ての〈有法〉は義品、三 有解〈宗〉のほかに〈有法差別〉と〈宗所立〉は均しく義品、四 基〈宗〉を除いて〈法〉と〈有法〉との不相離性は〈宗同品〉)あることの紹介²⁹⁾。
- 11) 普光は、『開元釈教録』に基づく説明と『大因明記』(散逸)の紹介。
- 12) 壁法師は、〈因法〉と〈有法〉との外延関係を示している旨の紹介。
- 13) 義浄は、彼の翻訳した經典紹介と併せて玄奘に先立つ『集量論』(散逸)、及び『因明正理門論』(最初の三〇〇字余以外散逸)の存したことを記している。
- 14) 智周については、(一) 五明(五明の解釈を行い内明は仏家の教義、因明は他論を挫き除いて勝利

するための工具書と見なしており、当時の因明の特徴とも合致しているという旨)、(二) 八能立過の分類(『瑜伽師地論』中の八能立過分類において引喩に〈同喩〉〈異喩〉、闕引喩に〈闕同喩〉〈闕異喩〉を含む等の説明)の紹介。

以上、唐代の諸僧について因明の特徴を簡潔に記しており、簡便に注釈者たちの特徴を知る上では参考に供されるものであろうが、各見解については賛否があり、唐代因明研究のポイントとなる部分が多々まだ研究未開拓部分の多いところでもある。この後は東への伝播―新羅・日本等―について述べている。

続く、第三節「唐代因明の東漸」では「東漸期の因明伝播史」を述べるもので、新羅・日本等の半島・列島の因明に関係する人物―円測・智仁・玄苑・元暁・道証・勝莊・太賢・義天、道昭・護命・玄昉・善珠・明詮・春徳・空操・永超・頼信・鳳潭―の紹介を行っている。朝鮮半島では右記の通り新羅の円測から高麗の義天までの八名を取り上げており、円測(六一三〜六九六)の『因明正理門論疏』(散逸)、智仁の玄奘『因明正理門論本』翻訳時筆受役、玄苑(六五〇〜)の『大因明論疏』(散逸)・『因明正理門論鈔』(散逸)、元暁(六一七〜六八六)の『判比量論』(散逸)、道証の『因明正理門論疏』(散逸)・『因明正理門論抄』(散逸)、勝莊の『因明正理門論述記』(散逸)、太賢の『因明正理門論古述記』(散逸)、義天(一〇五五〜一一〇一)の宋・日本からの経論将来及び仏典註釈活動等について簡単に触れている。一方、日本については南寺伝と北寺伝の二伝に触れ飛鳥時代の道昭から江戸時代の鳳潭までの一〇名を取り上げている。そこで日本因明について一言しておく、唯識初伝である道昭(六二九〜七〇〇)の因明伝来への貢献。南寺伝を代表させて護命(七五〇〜八三四)の『研神章』『破乘章』『分量決』⁸⁾の名を出して、このうち『研神章』中の「略顯因明正理門」における因明の義・六因・九句因・因三相・一四過等々

の因明記述を説明し、併せて武邑尚邦氏の説明に触れている。玄昉（一七四六）では入唐事跡を述べ、北寺伝を代表させて善珠（七二七～七七九）の『因明入正理論疏明燈抄』（『明燈抄』と略称）を『因明大疏』の解釈を通して基の視点から解釈しているとして法相宗における正統な因明解釈を反映していると捉えている。そこでは「述して作らず」という前代の視点からの創作方式を述べ、散逸した書を多く引用している点から因明研究の重要著作と位置付けている。平安時代では、明詮（七八九～八六八）は南寺伝因明研究の学者として『因明入正理論疏導』『因明大疏裏書』『因明四種相違私記』の名を挙げ、これ以降日本人僧侶による因明研究について中国の影響を受けない独立へ向かう分類研究を行っている」と評価している。次いで春徳（一八七〇）の『因明入正理記』、空操（八四九～九〇四）の『因明入正理論記』、永超（一〇一四～一〇九五）の『東域伝灯目錄』・『因明入正理論記』、頼信（一〇一〇～一〇七六）の『因明入正理論記』の各因明関係書名を列記し、続く中世期は触れず江戸時代では鳳潭（一六五四～一七三八）の『因明入正理論疏瑞源記』（『瑞源記』と略称）を取り上げて同書巻末付録の「因明本支経論疏記総目」に記載されているインド・中国・日本の因明書の目録を重要な参考価値のあるものと見なし鳳潭の同書を高く評価している。鳳潭の同書は中国では比較的早い時期から出版されていて、既に戦前に上海の商務印書館から一九二八年に出ており、今回の本書でも台南の知者出版の二〇〇二年出版本を使用している。鳳潭の書に唐代から清代までの中国では既に散逸してしまった書も引用するなど、長期に亘る因明伝承と発展の意義が認められる点に注目している。この点で本書では『瑞源記』より以前の書『明燈抄』・『大疏抄』（評者付加…著者は蔵俊）及び『瑞源記』より以後の書『融貫抄』（評者付加…著者は基辨）よりも評価している。殊に今日参考に供する資料例として、他に玄応の『因明入正理論莊嚴疏』にある唐代の四人の同品解釈を輯録している例を示し紹介している（上述玄応の箇所でも彼の特徴として言及している）。また

原文の引用に関しては、原文通りの引用と異なる引用の仕方をしている点にも触れており、そこには鳳潭の潤色がみられ、鳳潭の因明解釈の一端が示されているともしている。このような潤色点を批判する向きにも触れながらも総じて参考文献の多さに高い評価を与えている。

以上、日本の僧侶紹介では奈良期四名・平安期五名と江戸期一名のみで、特に江戸期の鳳潭を比較的詳しく紹介しており、ここで中国散逸書を含めた資料的価値の観点から叙述していることが理解できよう。ただ、あくまでも中国における因明展開という観点から叙述している中での東漸に触れているため、日本の叙述箇所でも中国で散逸した書を含めた資料的価値から記述していると見られる。そのため鎌倉期に触れるべき僧侶がないわけではないものの敢えて理由を述べずに触れていないのは、因明東漸の様相を示すには少々偏りがあると見られてもしかたがないかも知れない。しかし、上記観点からの叙述である点を考慮すると、やむを得ないと言いうことも可能である²⁶。

三

玄奘による新因明伝来によって新たな展開を経た後には、研究停滞期を向かえたとして第三章に「埋没期―宋明時期の因明」と題し九世紀から一七世紀までの宋・明期を取り扱っている。ここでは沈滞する中でも活動していた諸僧を示す第一節「宋明時期の因明伝播史」並びに何人かを紹介している第二節「宋明時期の人物紹介」の二節を置いている。

第一節では宋から明への因明伝播史としての事情は、中国では唐等の仏教弾圧を経ることで情報量が少なかったために鳳潭の『瑞源記』により智周以後から唐末までの一六書・宋代での一七書等を知ることが

できるようなったと述べているが、実際に眼にすることができるのは永明延寿（九〇四〜九七五）の『宗鏡録』一書のみと言う。このように今日まで実物が残らないような停滞を招いたのは、外圧としての仏教弾圧もさることながら、そもそも因明自身の特徴とその捉え方に原因があるとしている。即ち玄奘の二書はあくまでも思弁のための工具として成立しているため、中国人は因明を掴みにくく捉えにくい学問と見なし、あまつさえ玄奘の弟子内でも呂才との論争で明らかにしてきたように因明の軽重度の違い―生死・解脱・成仏等の問題ほど重要事項ではないという認識が広く存していたことを示している。

因明学の背景となる時代状況として語られるのは明代からで、明時代に入ると王学運動と古学（経学）復興運動の二大学術潮流が生まれ、中後期に至ると「経世致用」を核心とする新しい実学思潮が生じて学術範囲を儒学經典から自然・社会・思想文化へと拡大させ士大夫の視野を広げるはたらきを齎し、この時期の仏教も新しい発展の時期を向かえてたとしている。これは後漢から続いた主要な仏典翻訳事業が終り、またインド仏教の滅亡とも重なることで、新たな流入がなくなったことから外来の刺激が失われたことにより、中国伝統学術思潮の制約を受け、それとの矛盾が先鋭化することで儒学との対立が激化していると分析している。この中で因明文献を六種、明昱『因明入正理論直疏』・『三支比量義抄』、智旭『因明入正理論直解』・『真唯識量略解』、真界『因明入正理論解』、王肯堂（一五四九〜一六一三）『因明入正理論集解』を挙げている（真界・王肯堂と智旭との解釈の相違にも触れている）。明代の人は実学の影響下に因明の「証真の力」を見出し、漢伝因明本来の「立破を以て宗と為す」という立論が中国伝統の発展に溶け込み、彼らの因明術語と概念理解への誤解すらも決して品位を下げないように変化した、というような言説によって肯定的に評価している。特に万歴年間（一五七三〜一六一九）に進士及第した非仏門の馮夢禎の『因明入正理論題辭』（一五七七）では正理の理解に重点を置き、因明を学ぶことは「証真の

人」を育て、その人の「実事求是」^⑧の態度が明代後期の政治的混乱や官吏の腐敗が横行した当時の社会的弊害を改革し、社会秩序を恢復することにつながるという理解していることに触れている。

上記の伝播史の中から具体的には以下の人物を紹介しているのが第二節「宋明時期の人物紹介」で、延寿・王肯堂・明昱・真界の四名を取り上げている。

延寿については、彼の著『宗鏡録』（同書を構成する問答章（一卷〜九三卷）は言葉は簡潔であるが意を尽くしているとしている）を盛唐以降から明末復興期に到るまで先人の後を受け新しく発展する端緒となる意義ある書とする見方を取っていて、その書には本宗（一心を宗と為す）を証明する仏教教理の目的等を包括する因明が列挙されており、しかも元代前後に散逸した唐宋時期の因明疏を数多く残している明代の因明研究者にとっては主要な参考文献となっていると指摘している。このうち巻五一にある〈真唯識量〉について論式に文軌・基・慧沼等に説かない〈合〉を加えた「宗・因・同喩・合・同喩・異喩」とし、〈合〉には〈自許〉の二字を用いていない点を挙げている。この二字は〈真唯識量〉の真正の因を構成しておらず〈合〉に立対両者共許の論式を記し、両者が論難する時にはじめて作用が現れると言うのである。その場合の〈自許〉解釈は基本的に基等の解釈を承け〈真唯識量〉の不共許の弊害を避けて対論者の主張を防ぎ勝ちを制するはたらきのあることも指摘している。

王肯堂については、万歴一七（一五八九）年に進士及第し明代の医学書分野に貢献した人であるが、因明については呂才以来因明を集大成しようとした非仏門人で、『宗鏡録』等因明書を参考にして専ら注を付けることに関心を向け教理を詳しく説き明かす方向にはなかったと見ている。ただ、これは当時の社会的文化的な傾向であるとも言える。彼の『因明入正理論集解』にもとづき（一）因明の基本理解（書中の「今藏寥寥止此二三種」）について玄奘訳の『正理門論』『入正理論』以外に義浄訳の『正理門論』を指すのか、

他の梵本を指すのか等々の問題点)、(二)『正理門論』著者の混淆(龍樹と誤解していた点と陳那の原本が明代まで存していたかも知れないという点)(三)、〈宗体〉への誤解(当時の他因明学者と同様に〈宗体〉を〈宗後陳〉「法・能別」と誤解していた点)、(四)〈因〉に対する解釈(鄭偉宏氏の見解「因の三相」解釈の誤り)の提示)、(五)〈真唯識量〉への研究(『宗鏡録』に順じつつ〈宗〉中の「眼識」と〈喩〉中の「眼識」との区分等を示す点)、(六)〈同品〉〈異品〉への解釈(〈宗同品〉と〈同喩依〉とは混じらないが、後者は〈宗同品〉〈因同品〉とが同時に現れつつその外延は〈宗因同品〉の外延ではない等彼の解釈を示す点)の六つの特徴を挙げている。彼の著作は、当時深刻な社会政治・歴史・文化の状況・因明書の散逸・因明学者の捉え方等々から沈滞期を迎えているというこの時期の研究の「面」を示す一例となっていると指摘している。停滞期にあっても注目すべき因明研究であるという意味合いで理解していると思われることができる。

明昱については、万暦年間(一五七三〜一六一九)王肯堂に唯識を学んだ講義録『成唯識論俗詮』を著し数多くの唯識書を記しているが、因明については『因明入正理論直疏』(一六二二)にもとづき(一)八門二益についての順序(因明を重んじる人の少なさ・唐代註釈の影響力の消失から『入正理論』等と異なり〈能立〉〈似能立〉〈現量〉〈比量〉〈似現量〉〈似比量〉〈能破〉〈似能破〉の順に八門を積す点)、(二)「多言」に対する解釈(書中の「此中宗等多言名為能立。由宗因喩多言開示諸有問者未了義故」の「多言」について、「言」字に正確に〈宗〉〈因〉〈喩〉の状況が示されるため「多」字に諸者の解釈の食い違い等の困擾を防ぎ合理的解釈をしていると見る点)、(三)〈宗〉に対する解釈(玄奘の解釈と異なり〈宗前陳〉を〈宗依〉、〈宗後陳〉を〈宗体〉と積している点)、(四)〈喩〉に対する理解(〈同法喩〉と〈異法喩〉との区分を唐代註釈よりも詳細に解釈している点)の四つの特徴を挙げている。ここに明代の

独自の解釈変化を読み取るうとしてゐる。

真界については、『因明入正理論解』にもとづきその特徴を（一）『入正理論』に対する独特な解釈（『入正理論』中の「論」が中心の言葉であつて、因明の正「義」は「論」により顕彰され二者は有機的に統一されている・「因」は方法生起の因等と解釈する点）、（二）〈能立〉に関する二義の解釈（〈能立〉には広義・狭義があり、前者は八門中の〈能立〉をさし〈似能立〉と相對し〈宗〉〈因〉〈喻〉を含んでゐる・後者は因明論式をさす「〈宗〉」を論証の主題である〈所立〉とするのに対し〈因〉〈喻〉をその根拠とする〈能立〉とする」点。これは基の誤りを正す明代の解釈の好例と論じる鄭偉宏氏の見解に賛同してゐる）、（三）〈宗体〉に対する誤つた理解（陳那によつて〈宗前陳〉〈宗後陳〉の二つの〈宗依〉を〈宗体〉と改めていたのを再び〈宗後陳〉を〈宗体〉「〈宗体〉は〈宗〉の主体で立論對論者双方の論弁主題である〈宗依〉は双方共許の弁論主題で立宗の標準とし〈宗体〉は立者が認め對論者は認めないもので、そうでないと〈宗過〉を犯す」と〈宗体〉〈宗依〉を嚴格に區別してゐる点）、（四）〈同品〉〈異品〉に対する解釈（〈能立法〉を〈同品〉と見なす等〈同喻依〉〈因同品〉〈宗同品〉を混淆してゐる点）、（五）「因三相」に対する誤つた理解（〈遍是宗法性〉では〈宗前陳〉には〈因〉を有し、〈因法〉と〈宗〉上の〈有法〉の順序を逆転させる点・〈同品定有性〉では〈因〉と〈宗〉とは齊しく〈宗〉は〈因〉によつて有すとする点・〈異品遍無性〉では〈宗異品〉には〈因法〉を有さない点等）の五つ挙げている。上記五つ以外にも探求する箇所は多く、たとえ王肯堂等々参考資料から誤つた説に基づく所があるにしても正しい理論を伝承しているため、漢伝因明の伝承と發展過程途上における位置付けとそれはたらしきを存するという理由から肯定的な価値を見出している。

上記のように明代の四名については、誤訳はあるものの独自の見解を有してゐて、この時期の因明研究

としては注目に値するものであることが理解できよう。日本ではこの時期の書は全く研究が進んでいないため参考になるものであろう。

四

明までの沈滞期を経て二〇世紀の因明回復期を叙述しているのが第四章「復活期―二〇世紀の因明」である。ここでは第一節に「二〇世紀の因明傳播史」、第二節に「二〇世紀の因明傳播の主要人物紹介」を行っている。まず前者では日本等から中国は因明の「第二の故郷」とまで言われたものが会昌の仏教弾圧等による因明文献の散逸や唯識宗派の衰退に随って沈潜期に入り、やがて清末に一部因明典籍が齎されて二〇世紀の起伏のある研究と発展の回復期を述べている。端緒は楊文会（仁山）がイギリス滞在中に南条文雄と知己の間柄となることで、三〇〇余の隋唐代の仏典を將來し、その中に基の『因明大疏』・神泰の『正理門論述記』や慧沼・智周の疏記が含まれていたことによる。一八九六年に『因明大疏』が出版され楊文会の提唱の下で歐陽竟无・梁啓超・謝無量・章太炎等の学者が因明研究に着手し出して因明の復活と高揚に重要な貢献をはたしている辺りを述べている。後者では伝播史のうちから何名かの因明研究者を紹介している。ただし、清代の因明研究については前章・今章でも触れられていない。

まず第一節では「一 世紀の交わり、因明の復活と高揚」・「二 二〇世紀前半、因明研究高潮の出現」・「三 二〇世紀五〇年代から七〇年代までのゆっくりとした発展」・「四 二〇世紀後期、因明研究高潮の再盛り上がり」と、時系列に沿って因明研究の推移を述べている。この辺りの事情は日本では殆ど知られていないために、多くが近代の研究者とその著作に費やされているものの、少々一瞥しておくこととする（なお書名は原

題のまま(すなわ)。

一では、嚆矢として一九〇二年梁啓超の『論中国學術思想變遷之大勢』により弁論学・西洋論理学・因明の三者の比較研究を行い、中国において因明と西洋論理学とに関心が向けられる端緒となっている。一九〇六年日本留学の胡茂如による大西祝『論理学』を翻訳出版して中国へアリストテレスの演繹論理・帰納法を紹介し三支作法と三段論法との比較検討を行い、これが因明の普及と研究及び因明と論理学との比較研究への重要なはたらきとなっている。一九〇九年章太炎の『原名』によりインドの因明・西洋の論理学・中国の『墨經』の論式比較を行い、因明の復活及び研究に重要な役割をはたしている。

二では、1「因明研究の開始と多くの学校の教室」、2「大量の通論著作の出現」、3「世に問う研究者作」、4「因明典籍の訳注整理と突破」の四項目で示している。1は多くの学校(院校)で研究が始まり因明典籍の訳注整理へと進んでいる時期。即ち、一九二二年歐陽竟无と章太炎の支那内学院及び太虚の武昌佛学院設立により因明・唯識の伝習等や人材育成(呂澂・熊十力・湯用彤・梁漱溟等)が行われている。これ以外にもとからある佛学院―中国佛学院の王森・閩南佛学院の虞愚・蘇州覺社の王季同・常熟淨光佛社の慧三・北平三時学会の清浄によってそれぞれの学校での因明学課の設置、高級学校である高等院校―太虚による武昌中華大学・王森による私立中国大学及び清華大学・熊十力、周叔迦、熊紹堃による北京大学・周叔迦による民国大学・陳望道による復旦大学での因明授業が行われるようになり、多くの学者への因明認知・因明研究等が進み、今までの僧侶のみの因明研究から一般の人にも因明研究の機会が拡大されて、ますます仏教における論理思想の研究等が進んでいる状況を記している。これを承けて2では謝無量『佛教論理学』・太虚『因明概論』(一九三六年)・呂澂『因明綱要』(一九二六年)・虞愚『因明学』(一九三六年)・陳望道『因明学』(一九三一年白話文因明通論の嚆矢)・許地山『陳那以前中觀派与瑜伽

派之因明』(一九三二年・因明史・古因明の研究の嚆矢)及び講經式通俗書として周叔迦『因明入正理論
釈』(當時未出版一九八九年初出版)・王季同『因明入正理論摸象』(一九三〇年)・史一如『因明入正理
論講義』(一九三二年)・清淨『因明入正理論釈』(一九四三年)等、通俗書として虞愚『因明入正理論科
文』(一九三三年)・周叔迦『因明新例』(一九三六年)・熊紹堃『因明之研究』(一九三九年)・虞愚
『印度論理』(一九三九年)等々大量の書籍が現れている。この通俗書と併せて3では研究書でも歐陽竟无
『因明正理門論叙』(一九二七年)・『正理門論』法称『正理滴論』の比較研究の嚆矢等)・陳大
齊『因明大疏蠡測』(一九三八年)『因明入正理論悟他門淺釋』『印度理則学』(一九三九年)龔家驊『邏輯
与因明』(一九三五年)等及び一部の通俗書内の章節にも因明と論理との比較研究があると言う。そして
4では因明典籍の漢訳注として呂澂『因輪抉擇論』王森『正理滴論』等々、因明を含む大藏經の出版と
して一九二七年歐陽竟无による『藏要』出版を始め日本の『續藏』影印出版・『宋藏遺珍』出版等が行わ
れ因明研究への資料を提供しているという状況を提示している。

3では、文革等の影響がある五〇年以降三〇年間のあまり活発な展開が見られない時期である。しかし
その中で、虞愚の『現代佛学』『哲学研究』両雑誌への発表、上述陳大齊の『印度理則学』、石村の『光明
日報』乃至丁彦博の『文匯報』への発表等が行われている。文革期大陸では総じて停滞している間、台湾
では上述陳大齊の書や李正傑『因明学概論』の出版、水月法師・李潤生の活動がなされている。文革終了
後漸く徐々に正常な研究軌道に戻りつつある中で、霍韜晦『佛家邏輯研究』(一九七八年)・附録「陳那以
後佛家邏輯的發展」は陳那と法称の論式の比較研究)・『陳望道文集』(一九七九年)・周文英『中国邏
輯思想史稿』(一九七九年)が出版されていると言う。

4では、八〇年代以降の二〇年は経済が発展し始めそれに連れて社会科学も発展し因明学の分野でも種々

の成果を得たと述べている。即ち1「因明分野の人材育成」、2「因明學術會議の開催」、3「文献資料の収集と出版」、4「學術成果の出現」の四項目を挙げている。1では一九八二年中国社会科学院哲学研究所と中国邏輯史研究会が因明座談会を開き「因明遺産」への応急処置（保護）及び因明の発展が学术界出版界の差し迫った重要な任務という認識に到って党中央や國務院へ報告し、陳雲の指示を得て動き出している点。具体的には一九八三年中国社会科学院哲学研究所に因明講習クラスが設置され虞愚による因明伝播・發展史や因明基本教理の教授。一九八五年同所に因明・中国西洋論理史講習クラスが設置され瀋有鼎・虞愚・劉培育等による論理と因明との相關理論の講義（この時の学生に張忠義・鄭偉宏らがいる）。更に復旦大学・南開大学・中央民族大学・チベット大学・華東師範大学等に因明関連学科が設置され、中国社会科学院・復旦大学・中国人民大学・華東師範大学等には大学院博士課程が設置されている。2では一九八三年八月甘肅省敦煌・酒泉で全国因明學術討論会が開催されインド因明・中国名弁・西洋論理の根源等・因の三相問題・因明は仏教論理か否か等々が討議され、會議論文集『因明新探』の出版（一九八九年）された点。一九八九年一〇月北京で中国論理史研究会・中国社会科学院南アジア文化研究センター・中国佛教文化研究所・中国チベット学研究センター合同でチベット中国因明學術交流会が開催され、新中国誕生四〇年の因明研究成果の回顧・国内外の研究状況・チベット因明の發展特徴・チベット因明の論式規範等・チベット因明と中国因明について三支論式の性質と構造、因の三相、同品異品は宗有法かどうか等々の討論・サンスクリット語チベット語英語古代中国語相互对照方法・現代中国語への翻訳の討議があり、劉培育編『因明研究―佛家邏輯』の出版（一九九四年）された点。3では一九八二年甘肅人民出版社から呂澂・虞愚・石村・丁彦博・周文英・瀋劍英の論文等を収録した劉培育・周雲之・董志鉄編『因明論文集』の出版された点。更に一九八九年・一九九四年上記二学界の論文集の出版のこと。台湾では『現代

学術叢刊』に『佛教邏輯与辯證法』『佛教邏輯之發展』が編入されたり水月法師の『因明文集』第一集（一九八九年）・第二集（一九九二年）出版や一九七七年から一九八七年まで因明専門雑誌の創刊のこと。これ以外にも一九九一年に『中国邏輯史資料選現代卷下』・『中国邏輯史資料選因明卷』が出版され『因明概論』等過去の著作・因明文献が収録されているといった諸点である。4では一九八〇年から一九九九年出版までの学術専著及び学術論文が個々の年代は記載されていないものの列挙されている。ここでも現代の研究成果紹介の意味合いで、敢えて煩雑さを顧みず以下に概ね列挙してみることにする（但し論文には収録雑誌名等は記されていないので、そのままとする。また通し番号は評者が便宜上附加する）。

前者では、

- 1) 通論書に、石村『因明述要』・虞愚『因明学』・呂澂『因明入正理論講解』・宋立道『因明入正理論』・中国文化研究所編『因明入正理論釋』・李潤生『因明入正理論』・鄭偉宏『因明入正理論直解』・潘劍英『因明正理門論詳解』（『佛家邏輯』下篇）・慈航法師『相宗十講』、論理史に楊百順『比較邏輯史』・張忠義『中国邏輯史研究』・李匡武編『中国邏輯史』等。
- 2) 研究書に、水月法師『古因明要解』・呂澂『入論十四因過解』・潘劍英『佛家邏輯』上篇『因明学研究』『唐玄奘与因明』・鄭偉宏『佛家邏輯通論』上篇・巫寿康『因明正理門論研究』・許地山『道教、因明及其他』・林崇安『佛教因明的探討』・吳汝鈞『佛教的概念和方法』。
- 3) 訳書に、宋立道舒曉煒『佛教邏輯』（ツェルヴァキー）²⁸・張春波『印度邏輯学論集』『印度邏輯学的基本性質』（梶山雄一）・孫中原『東方的合理思想』『現代邏輯学問題』（末木剛博）・吳汝鈞『陳那之邏輯』（北川秀則）・黄宝生、鄭良鋈『印度哲学』（トゥハパタティヤ）。
- 4) 因明関連に、熊十力『佛家名相通釋』・吳汝鈞『佛教的概念和方法』・『基本漢、藏、梵、英佛学術

語・湯用彤『印度哲学史略』・巫白慧『印度哲学与佛教』（英文版）・黄心川『印度哲学史』・姚衛群『印度宗教哲学百問』『印度哲学』・劉培育編『虞愚文集』等である。

後者では、

- 1) 因明書の中国語訳及び対校に、巫白慧「論初期佛教邏輯及其有關文献」（杜芝）・孫中原「新因明的邏輯」〔因明邏輯的謬誤論〕（末木剛博）・瀋劍英「陳那的因明」〔正理門論〕〔入正理論〕与欧洲及印度学者」（宇井白寿）・姚南強「中国与日本的佛教邏輯」及「西藏和蒙古的佛教邏輯」〔ツェルヴァキー〕²⁸⁾。

- 2) チベット語からの翻訳に、王森、楊化群『正理滴論』（法称）・楊化群、宋曉嵒『入因明階梯』（波米強巴洛卓）・楊化群『因明学啓蒙』（普覺強巴）。

- 3) 因明概論に、瀋劍英「因明学簡論」・羅炤「因明概述」・鄭偉宏「因明概論」・胡曉光「因明概観」・李大平「過論述評」・宏度「試釋」七因明」・水月「成唯識論述記序淺釋」等。

- 4) 因明理論に、瀋劍英「因明三論」・瀋劍英、姚南強「陳那邏輯体系簡說」・姚衛群「印度古代邏輯的理論」・徐東來「注重言說的邏輯学——因明」等。

- 5) 『入正理論』の簡訳に、鄭偉宏「因明入論初頌悟他門講解」・惠莊「因明入正理論」淺釋」等。

- 6) 因明呼称に、楊化群「爲「因明」——詞翻譯的辯解」・水月「正名」。

- 7) 国内因明状況に、劉培育「因明和中国」・瀋劍英「因明古籍整理芻議」等。

- 8) 因明史に、虞愚「因明在中国的傳播和發展」・巫白慧「印度邏輯及其源流」〔国外因明学研究〕・劉培育「因明三四年」〔因明研究取得的進展〕〔四〇年因明論著索引〕・劉延寿「我国近二〇年的名辯、因明研究——從甘肅人民出版社的有關著作看」・水月「近五年中土因明研究概説」・周文英「印度邏輯史略」

・潘劍英「因明學的產生、發展和東漸簡論」・姚南強、徐東來「佛教邏輯的淵源與沿革概念」・鄭偉宏「現代因明研究概論」「現代因明研究概論」・姚南強「因明研究四〇年述要」「因明史略」「百年來的中國因明學研究」「因明發展史梳理」・範成存、張忠義「漢傳因明在中國的傳播與弘法」・袁淑真「因明在中國的三階段逆述」等。

9) 因明教理に、潘劍英「論因明之三種比量與簡別方法」・鄭偉宏「因明三種比量探討」・繆元全「世間現量與出世間之分岐」・黃志強「論因明比量」・呂激「真唯識量」・潘劍英「真唯識量」略論」・羅炤「應當實事求是地對待“真唯識量”——與潘劍英同志商榷」「有關“真唯識量”的幾個問題」・張春波「玄奘的“真唯識量”」・鄭偉宏「玄奘唯識比量新解」・水月「真唯識量」是典型的共比量」等。

10) 〈因三相〉には、潘劍英「論因明三相」「關於“因”的三相可以缺——嗎？」・周雲之「因的“三相”可以缺——嗎？」・鄭偉宏「論因三相」・徐東來「也談因三相——與黃志強同志商榷」・阿旺丹增「關於九句因和因相的邏輯問題探討」・黃志強「因三相二題」「因三相管見」「再論因三相」・曹飛「因三相是保證因、喻真實的規則」等。

11) 因明論式には、張忠義「試論因明的三義論式」「因明論式只有第一格A A A式嗎？」・鄭偉宏「略談陳那新因明的推理性質——答姚南強同志」・姚南強「論陳那三支式的邏輯本質——兼與鄭偉宏商榷」・曾祥雲「因明三支作法辨析」「論因明三支作法的實質」「關於三支式的表述形式——與張忠義先生商榷」・曾慶福「因明三支式的邏輯性質尚需探究」「論因明三支式的邏輯性質」・阿旺丹增「陳那新因明的論式支分探究」等。

12) 因明的論理性質に、周文英「印度邏輯推論式的基本性質」・潘劍英「印度古典論證式的邏輯本質」・宋立道「因明三支作法的邏輯性質」・鄭偉宏「陳那新因明是演繹論證嗎？」・張忠義「對新因明邏輯的

理解——与日本末木剛博教授商榷」「對日本專家“新因明邏輯”的商榷」·水月「喻支證成」「宗的差別」「九句宗法」·巫白壽「論四句義的哲學內涵」·黃心川「印度正理論的認識論和邏輯思想」·瀋劍英「論因明之有体与無体」「論因明之四種相違」「論因明之喻」「九句因論分析」·劉培育「因明研究中的幾個主要爭論問題」·張忠義「從“定有”看“同品定有性”」「因明的“合離”与“分離”規則」·「玄奘加譯“因明”与“定”字的意義」「從現代邏輯看“四句否定”」「“四句否定”新解」·巫寿康「因明正理門論」論式中的歸納成分」「論〈因明正理門論〉体系内部的矛盾及解決矛盾的新途徑」·鄭偉宏「論因明的同、異品」·「陳那新因明喻体的邏輯形式」·姚南強「論因明的“除宗有法”——再与鄭偉宏商榷」·「因明爭論之我見」·吳汝鈞「印度中觀學的四句否定」·曹德錚「因明演“有”」·徐東來「論因明的爲他、爲自」·魏德東「唯實的因明論證」等。

13) 三大論理的比較研究に、孫中原「印度邏輯与中国、希臘邏輯的比較研究」·董志鐵「東西西方邏輯三源交匯与比較研究」·張盛彬「論因明、墨辯和西方邏輯學說推理理論之貫通」·吳志雄「古代三大邏輯學說證理論的簡單比較」·「因明、墨辯」·垂里士多德邏輯比較研究」·谷振指「東西西方邏輯探源与比較」·陳克守「墨辯、因明与垂里士多德演繹邏輯比較」·「三大古典邏輯論辯理論比較」·「三大古典邏輯概念論比較」·趙夙珠「試論因明、墨辯和西方邏輯傳統非演繹推理之異同」等。

14) 因明と西洋論理の比較研究に、崔清田「三支作法与三段論辨析」·楊百順「印度邏輯論式的演變及其与西方推理式略論」·「印度邏輯与西方邏輯比較舉隅」·巫寿康「三支論式和三段論是互相独立的兩種推理形式」·鄭偉宏「因明三支作法与邏輯三段論之比較」·李延錚「因明三支作法与巫氏三段論」·劉春傑「因明三支論式与垂里士多德三段論比較」·尹智全「因明三支論式与巫氏三段論」·王漢「因明三支論式与三段論辨析」·康偉、馮曉民「因明三支作用与三段論規則之比較」等。

- 15) 因明と中国論理の比較研究に、崔清田「試論〈隅辯〉の“故”与因明的“因”、“喻”」・周山「因明与名辯」・曾昭式「論因明之喻与墨辯之理類」等。
- 16) 因明体系内の比較研究に、孫中原「日本学者末木剛博對因明比較研究」・鄭偉宏「陳那法称因明邏輯体系之比較」・姚南強「墨辯与因明的邏輯比較」・徐東来「論法称与陳那邏輯思想之差異」等。
- 17) 因明と仏教の比較研究に、高振農「因明与佛学」・孫志成「試論因明与佛家邏輯的關係」・方廣錫「因明不等于佛家邏輯」等。
- 18) 比較研究への解説評論に、彭漪漣「中国近代中外邏輯思想對比研究的成就与不足」・曾祥雲「中国近代比較邏輯研究的貢獻、局限与啓迪」・翟錦程「比較邏輯研究述介」「比較邏輯研究的几个問題」・範成存「西方邏輯和印度因明在中国」等。
- 19) 因明学者の思想研究に、袁野「研究因明的学者及其学說的概述」・潘劍英「唐代諸師在因明研究中的岐見与論難」。
- 20) 玄奘因明思想には、温公顧、崔清田「記念玄奘研究因明」・虞愚「玄奘因明的貢獻」・水月「玄奘三藏對因明的學習与弘傳」・張春波「玄奘對唯識学說的發展」・楊百順「玄奘与因明」「玄奘是東方邏輯学的傳播者」・潘劍英「玄奘与唐初的因明研究」「唐三藏与因明」「玄奘是中国邏輯史上的一块里程碑」・崔清田「玄奘是唐代漢傳因明」・劉培育「玄奘在中国邏輯史上的貢獻」・韓廷傑「玄奘對唯識学的發展」「玄奘對因明学的發展」・高振農「試論玄奘学說在近代中国的復興」・張忠義「玄奘對因明研究的發展与貢獻」・鄭偉宏「論玄奘的因明学成就」・袁揚福「我国因明開山祖師——玄奘」・蔡惠明「玄奘大師對因明学的貢獻」・馬全智「玄奘与佛教及因明、論辯之關係」・解志敏「玄奘大師与因明学」等。
- 21) 印度の新因明論師に、虞愚「法称在印度邏輯史上的貢獻」・楊百順「法称邏輯思想述評」・巫白慧、

- 巫壽康「陳那和他的因明」·姚南強「法称因明探析」「論法称對陳那因明的改造和發展」·徐東來、姚南強「法称及其後的佛教邏輯學家」等。
- 22) 唐代因明研究者に、崔清田「呂才的因明研究」·蔡伯銘「呂才与因明」·瀋劍英「略論神泰与文軌的因明研究」「論呂才的邏輯思想」「呂才与因明」·姚南強「略論慧沼的因明貢獻」「慧沼的因明思想探析」·徐東來「義淨對因明學的貢獻」等。
- 23) 近代學者の因明思想研究に、樓宇烈「太虚与中国近代佛教」·水月「孫文學說採用因明方法」·彭漪漣「試論章太炎的邏輯思想及其成就」「章太炎對西方邏輯、印度因明和墨家邏輯的對比研究」·李先焜「章太炎、梁啓超、章士釗的中西邏輯的比較研究」·董志鐵「試論虞愚因明与邏輯的比較研究」·周雲之「章炳麟的邏輯思想」·張忠義「妙辯于餘〈虞愚〉處」·鄭偉宏「別開漢傳因明學研究的新生面——呂激前期因明思想評介」·曾祥雲「梁啓超比較邏輯思想述評」·瀋海波「章太炎与因明」「宋恕与因明」·彭汶「試論梁啓超對墨家邏輯、印度因明和西方邏輯的對比研究」等。
- 24) 近代国外因明學者的思想研究に、水月「日人中村元的因明見解」·孫中原「末木剛博對東西方邏輯和文化的比較研究」等。
- 25) 著述の書評·研究及び因明著作の研究に、巫白慧「因明學在我国的復興——評〈因明論文集〉」〈因明論文集〉評介」「中国因明學研究的最新成果——簡評〈因明研究〉」·瀋劍英『墮負論札記』『誤難論』「〈遮邏迦本集〉的論議原則」·虞愚「“因明入正理論”的内容特点及其傳習」「“因明正理門論”簡介」·水月「古因明要解序」·劉培育「介紹几種有關因明的書」·張家龍「〈因明正理門論直解〉序」·楊化群「關於法称的〈正理門論〉」·巫壽康「〈因明正理門論〉研究二題」·周雲之「喜讀張忠義著〈中国邏輯史研究〉」·張忠義「〈因明大疏蠡測〉的蠡測」·鄭偉宏「陳大齊對漢傳因明的卓越貢獻——〈因明大疏

蠡測》評介」「熊十力〈因明大疏刪注〉評介」「法称〈正理滴論〉評述」「略論〈因明正理門論〉の邏輯體系」・姚南強「〈正理門論〉探微」「法尊法師因明著述略介」等。

- 26) 因明関連論文と學術活動に、水月「寂寞の因明」「因明不寂寞」「因明教判芻議」・巫白慧「耆那教的邏輯思想」「印度古代辯證思維」「佛教哲學與精神文明」・黃心川「印度正理論的哲學和邏輯思想」・劉培育「二氓同志提倡學習邏輯和因明——記我接觸到的幾件事」・宋立道「因明的認識論基礎」・瀋劍英「因明的語用學」・孫昌武「論『儒釋調和』」・林傑、段一平「因明思想起源初探」・晁連成、張忠義「佛家邏輯的若干問題探討」・姚南強「略論佛家辯學的現實意義」・顏華東「簡論因明研究的現代意義」・胡曉光「對大乘佛教一些重要問題的思考」・曾祥雲「因明研究中邏輯主義評述」・歐陽楨人「淺論佛教精神與戲劇的內在聯系」等。

- 27) 因明と『文心雕龍』との關係には、黃廣華「〈文心雕龍〉與因明學」・張一平「也讀〈文心雕龍〉結構框架的形成——與孫芙蓉同志商榷」・普慧「〈文心雕龍〉與佛教成實學」・孫芙蓉「再談〈文心雕龍〉結構框架的形成——與張一平先生再商榷」等。

- 28) 関連學術活動の解説・紹介に、中国社会科学院哲学研究所舉辦因明學和中国、西方邏輯史進修班・孫中原「全國首屆因明學述討論會」・張忠義「藏漢因明學術交流會綜述」「玄奘國際學術討論會述要」・殷銘「全國首屆因明學述討論會綜述」・元金「全國藏漢因明學術交流會綜述」・黃夏川「第二屆國際玄奘學術研討會」「玄奘國際學術討論會綜述」等。

以上、二〇世紀を幾つかの發展段階を經ているとして、上述の通り四つに分けて述べている。初期は、有志の人たちが推進した因明の復活と弘揚。二〇世紀前半は、因明研究の高潮。五〇年代より七〇年代は、因明發展の緩慢・停滯。二〇世紀後期は、党中央による「因明を守れ」の呼びかけに應じて、因明學者た

ちの推進の下で因明の研究の再高潮を向えていると指摘している。この後、第二節では二〇世紀に活動した研究者を一九名取り上げて説明を加えている。ここではその名前のみを挙げておくことにする。

第二節「二〇世紀因明伝播の主要人物紹介」と称して、一楊文会（生没年無記載）、二宋恕（一八六二～一九一〇）、三歐陽竟无（一八七二～一九四三）、四章太炎（一八六九～一九三六）、五丘槃（生没無記載）、六熊十力（一八八五～一九六八）、七謝無量（一八八四～一九六四）、八陳大齊（一八八六～一九八三）、九太虚（一八八九～一九四七）、十陳望道（一八九一～一九七七）、十一許地山（一八九一～一九七七）、十二持松法師（一八九四～一九七二）、十三呂澂（一八九五～一九八九）、十四常惺法師（一八九六～一九三九）、十五周叔迦（一八九九～一九七〇）、十六虞愚（一九〇九～一九八九）、十七羅時憲（一九一四～一九九三）、十八齊思貽（一九一八～一九八六）、十九石村（生没年無記載）、が挙げられている。何れも一九世紀から二〇世紀の初頭に誕生し、概ね二〇世紀に活躍した研究者たちである。この一九名の中には上述の著作・論文の例示に名前の挙がっていない人もおり、因明研究復活期から以降、急激な因明研究の高まりの一端が垣間見られるようである。

今章で二〇世紀の因明研究史を述べた後に、二二世紀の現在の因明研究を記すのが次章である。

五

第五章では「発展期―二二世紀初頭の因明」と題して、第一節「二二世紀初頭の因明伝播史」と第二節「二二世紀初頭因明伝播の主要人物紹介」を行っている。本書出版年までの十年余を扱う章である。

第一節の二二世紀初頭の因明としては一 因明会議の相次ぐ招集、二（因明）資源配置の増加、三 学

術組織と研究機構の相次ぐ成立、四 因明課題の申告と研究、五 因明学術論文、六 因明專著の出版状況、七 因明人材の育成、の各項目に分けて説明している。少々箇条書き的に紹介しておくこととする。

一の学会とは、1)二〇〇六年六月一五日～一六日 第一回国際因明学術研討会(于杭州。中国社会科学院哲学研究所・中国論理学会・玄奘研究センター・中国チベット学術研究センター・燕山大学・中山大学・杭州佛学院連合開催)―近年の因明研究の進展、因明精神と現代社会の發展關係の討議。2)二〇〇六年九月二〇日～二二日 第三回玄奘國際学術研討会(于成都。玄奘研究センター・中国人民对外友好協會・四川省仏教協會・成都市仏教協會共同開催)―會議テーマに玄奘と現代社会。仏教訳書と因明理論の新機軸と發展領域、玄奘の学術成果の討議、内外研究者の研究状況への客観的評価、玄奘の歴史的評価と玄奘精神の社会的評価。3)二〇〇七年六月一四日～一七日 第三回中国因明学術研討会^⑧(于西寧。中国論理学会因明専門委員会・中国チベット研究センター・杭州仏学院・燕山大学・青海民族学院・青海仏学院共同開催)―チベット因明研究の新成果、チベット因明教学状況、チベット因明と中国因明の比較研究、因明研究の回顧と展望。4)二〇〇八年一〇月一三日～一五日 第四回国際因明学術研討会(于蘭州。中国論理学会因明専門委員会・西北民族大学連合開催、西北民族大学チベット言語文化学院・杭州仏学院共同運営)―仏教文化と因明の關係の研究、中国因明とチベット因明の比較研究、文法学と文学における哲理と因明論理の關係の研究、チベット因明僧侶の事跡研究、中国因明僧侶の事跡研究、西洋論理学と因明の比較研究、チベット因明とチベット民族伝統文化の關係の研究、形式論理と因明論理の比較研究。5)二〇〇九年七月三〇日～三一日 第五回国際因明学術研討会(于フフホト。中国論理学会因明専門委員会開催、内蒙古師範大学・内蒙古警察職業学院・杭州仏学院運営)―虞愚先生一〇〇周年誕生記念。6)二〇一〇年四月二四日～二五日 第六回国際因明学術研討会(于洛陽・宜陽。中国論理学会因明専門委員会開催、洛陽師

範学院・宜陽県人民政府共同運営)―無記載。計六つ挙げている。

二の因明資源の配置とは、因明探求に関わる新たなツールを作成することを意味していて、これに五つ明記している。1) 燕山大学因明文献センター―因明文献の検索機構となり、因明の伝播・発展・教理、国内外関連文献の収集・整理等、随時最新研究の動向・成果の蓄積。2) 玄奘研究サイト―玄奘研究センターが開き、因明研究専門のページを持ち、因明学界の最新動向の報道・最新研究成果の収集。3) 戒幢仏学院教育サイト―因明研究專輯を開き、因明典籍を収集(現代の仏教学者の研究成果)。4) 中国因明サイト―分かり易い通俗的解釈の提供。5) 因明専門雑誌の創刊―『因明』(中国論理学会因明専門委員会刊・甘肅民族出版社出版)、第一輯―二〇〇七年二月刊第三回全国因明学術研究会論文収録、第二輯―二〇〇八年一月刊第四回全国因明学術研究会論文収録、第三輯―第五回全国因明学術研究会論文収録(評者…第五回全国因明学術研究会が七月末に開かれ、その論文が同年一月発刊予定に収録されるのであろう)。

三の学術組織等の成立は、因明研究者達自身の組織である中国論理学会因明専門委員会の成立³⁰及び燕山大学の世界論理史研究センターの成立がある。

四の因明課題の報告等とは、公的機関への研究報告と言うことで、燕山大学張忠義教授による『中国因明的語用学思想研究』(黒龍江省教育庁人文社会科学学術研究項目)・『从語用学觀點看藏漢因明』(河北省教育庁人文社会科学学術研究項目)・『漢傳因明史論』(河北省哲学社会科学規畫研究項目)・『因明義理研究与争鳴―以三大邏輯的比較研究爲視野』(国家社会科学基金後期資助項目)・『因明三支、名辯三物与證成』(教育部人文社会科学規畫項目)。復旦大学鄭偉宏研究員による『佛教邏輯研究』(教育部人文社会科学研究基地重大項目)・『漢傳佛教因明研究』(国家社会科学基金項目)・『因明大疏』研究』(上海市社会科学基金項目)、広西師範学院黄志強教授による『佛教邏輯的現代研究』(国家社会科学基金項目)、

剛曉法師による『量理宝藏論』講記』『集量論』解説』（杭州佛学院課題）を挙げている。

五の因明学術論文では、前章と異なり具体的な主要論文名は出さず、梗概（出家在家者・八〇才代から二〇才代研究者・二〇〇余篇等）を述べるに止めている。

六の因明專著では、中華書局刊行の「真如・因明学叢書」出版（陳大齊・呂澂・虞愚・許地山・陳望道・石村・水月・瀋劍英・巫寿康・劇宗林・鄭偉宏等書を出版）に触れ、近年のものとして張忠義・光泉・剛曉主編の『因明新論—首屆國際因明学術研討會文集』、杭州佛学院主編『吳越佛教』第二輯、黃明信『藏学文集』、二での再掲張忠義・光泉主編『因明』第一輯第二輯、及び王森『藏傳因明』、楊化群『藏傳因明学』等中国・チベットの因明研究書を挙げている。これ以外に二〇〇三年からの五年間に刊行した剛曉の『正理滴点論解』『漢傳因明二論』『正理經解說』『佛教因明論』及び五での前掲二書の計八冊を高く評価し、姚南強主編『因明辞典』、姚南強『因明学說史綱要』、瀋劍英『敦煌因明文獻研究』、前掲の李潤生『佛学論文集』・張忠義『因明蠡測』・鄭偉宏『漢傳佛教因明研究』等を挙げつつ、その意義・内容を評価している。

七の因明人材育成では、1)第一回因明後備人材培訓班（二〇〇七年一月一五日〜二〇日于広東省南雄市大雄禪寺。中国論理学会因明専門委員会・中山大学論理と認知研究所・中山大学佛学研究センター・広東禪文化研究会・大雄禪寺連合開催。劉培育・鞠實儿・鄭偉宏・祁順来・張忠義・剛曉・肖平による学生教師への教授）、2)第一期梵文培訓班（二〇〇八年三月二四日〜四月二日于燕山大学。中国論理学会因明専門委員会・燕山大学連合開催。韓廷傑によるサンスクリット語・文献等の教授）、3)高等教育機関での因明研究人材の培育（復旦大学・燕山大学・中央民族大学・南開大学・貴州大学・西南民族大学・青海民族大学学院・広西師範学院等の事情）、の三つを説明している。

このように二一世紀に入って十年余の段階でも既に研究の質・量俱に盛んな状態にあることを十分理解でき、当局からの指示とは言えこの勢いは残念ながら日本では見られないほどの活況さを呈している。欧米での、中国因明を含めた東アジアの因明研究と比較してもその質・量で凌駕していると言わざるを得ないであろう。高等教育機関での組織的な研究体制の構築がなされつつある中、出家・在家の研究者から好事家まで含め、研究成果の「玉石混淆」という見方もないわけではないが、確実に「玉」が増えているのは確かであると思われる。この後、主要な研究者を紹介しているのが次節となる。

第二節では「二一世紀初頭因明伝播の主要人物紹介」と称して、二〇世紀から二一世紀の現在まで活動している或いは活動していた研究者を二二名取り上げて事跡を説明している。その名前のみを挙げておくことにする。一巫白慧（一九一九）、二周文英（一九二八）、三黄心川（一九二八）、四水月法師（生没無記載）、五潘劍英（一九三二）、六楊百順（一九三三）、七張曼濤（一九三三）、八李潤生（一九三六）、九巫寿康（一九三七）、十孫中原（一九三八）、十一劉培育（一九四〇）、十二霍韜晦（一九四〇）、が挙げられている（なお没年は出版当時までのもの）。何れも現在まで活動しているか或いは活動していた研究者たちで、現代中国における代表的な因明研究者を一覧に提示しており、中国仏教界が誰に注目しているのかもある程度理解できるものであろう。

六

最後に第六章で「因明の性質と対象を論じる」と題して、第一節「因明は論理学に編入できる」と第二節「因明は論理学に編入できない」との、因明と論理学との関係それぞれの考え方を示している。ただし、

これは曾祥雲『因明研究中的邏輯主義評析』の一文の再掲載である。要点は、前節では既に一九二六年謝蒙の『佛学大綱』で因明と論理学との比較研究を先駆けとし、龔家驊『邏輯与因明』を経て今日まで主張されており、高等教育機関の文科教材『普通論理』には「『因明』は論理である…『因』は推理の根拠、『明』は通常所謂、学説である。『因明』は古代インドの推理についての学説である」との説明を引き、更に同教科書ではアリストテレスの三段論法と因明の三支論式との比較から推理形式上基本的に一致するとしている点を挙げている。しかし併せて一九一八年のオランダの学者等々以来の異議も記している。また五〇年代以降新たな記号論理学等の研究の進展もあり、共通の研究テーマでもあると言う。今日、因明は論理であると主張する人たちは、論理用語を用いて因明用語を注解する・論理の原理を用いて因明の義理を解析する・論理推理形式を用いて因明論式を証するという手法を用いていると言う。ただそれでも因明の〈過失〉と論理学の〈誤謬〉には必ず関連があるけれども本質的な区別があることや因明の〈表詮遮詮〉・〈全分一分〉命題を解析する方法等々問題が多いと指摘している。即ち、因明は論理学に編入できるといふ観点は相手からの攻撃を避けられないと締めくくっている。一方、後節は仏教研究の学者や仏教界の高僧たちが主張していると言う。その主張は二つに区分される。一つに、因明は実際の弁論の必要性から立論される弁論体系であるため西洋の形式論理と同等にできないと言うのである。弁論は立破を核心として勝負を決する一種の直接対話で、正確な思惟法則を立てる西洋論理学とは大きく区別されると説いている。二つに、弁理論と論理学とに区別されると言う。弁論は言語行為であって関わっている要因は多く、論理学・言語学・修辞学・哲学・心理学・倫理学・コミュニケーション学^⑧・美学等多くの学問領域に関わっているため多くの知識の綜合運用であると、論理学の範囲に収まりきれない旨の主張をしている。あくまでも因明への研究は因明の弁論特徴に着目する必要がある、弁論の本質を離れ度を超して論理学用

語・原理と推理形式を使って因明用語・原理と推理形式を解釈すると種々の誤解を招くと言うのである。ただそうであっても弁論研究の立場に立脚し、狭隘な形式論理の立場を離れて現代言語学・哲学・倫理学・心理学等々の知識を工具として多方面に研究を進め多層的分析を行えば正しく因明を認識でき新たな進展が得られると、広範囲な知的交流から因明研究が進むはずであるとしている。因明は古代インドの日常の弁論の基礎の上に発展してきたもので宗教の実践目標の制約を受けるために因明の中の論理思想は日常を分析する実際の論証を基本的特徴としていると説明を加えている。あくまでも因明と西洋の正統論理学とは大きな区別があるということである。即ち、因明については、因明中に含まれる形式論理の要素はこれまでの因明研究者等によって関連する分析を得ており、その一方で否定できないのは因明中にも多くの非形式論理の内容が含まれており、それは生じた目的と対象とは分割できない関係を有していると言う。このように両者の考えを引用しているのは、因明と論理学とは複雑な関係を有している事実を認識する上で効果的であると理解できる。その一方で、単純に因明は論理学であるとも論理学ではないとも言い難い、重層的な相関関係を持っているという印象を強くするものである。

まとめ

如上、第一章の古因明の伝来から第六章の因明と論理学との関係まで、古因明伝来・南北朝・唐・宋明・二〇世紀・二一世紀の今日までの教義の歴史的展開及び研究史と因明・論理学関係の問題へと続く広範囲に亘る内容を一冊の書籍に収め、読者に因明の全体像を俯瞰させることができる構成となっている。これは外国人研究者にとっても中国因明の内容や展開及び教理上の問題点を概観できる所謂「ポータルサイト」

的なはたらきを齎し、加えて二〇世紀以降の二章では、たとえ十分でない点があるとしても研究者たちの研究データベース的要素もある著作となっていて活用が図られるものである。かつて一九世紀末から二〇世紀初頭日本から基の『因明大疏』等々の因明典籍を逆将来して以来、開始された因明研究はこの一〇〇年程の間に質・量俱に膨大な蓄積をはたしており、学界へ貢献していると言えよう。真摯にこの辺りの事情を直視しておく必要が認められるものであろう。翻って日本では近世まで一定の因明研究が続いてきたが、明治期以降、少数の研究者を除いて、漢文文献の因明研究は非常に少なくなっている。ただ、それに比ベインド論理学研究は国内外の研究者により今日に至るまで盛んに行われ重要な研究成果を齎していることは周知の事実であらう。

中国因明であれ日本因明であれ日本では漢文文献研究が少ないため、機会があれば、直接本書を繙くことによって改めて漢文文献にもとづく因明―中国因明―に接することができるであらうし、必ず何がしかの得るところがあるものと思われる。

註記

①広範囲に大衆を動員した、権力闘争の側面を持つ革命運動。この時期、工業・農業等生産力は著しく低下し、教育・生活・倫理面等は深刻な影響を被っている。毛沢東（一八九三―一九七六）の死去・江青等四人組逮捕により終息、その後共産党は誤りを認め失脚・糾弾された多くの人々の名誉回復がなされている。ただし、平野聡（東京大学）氏によれば、今日の社会の風潮は文革期の精神的荒廃により「人々が信じられるのは、ただ単にモノとカネのみとなった」（平野聡『反日』中国の文明史』一五八頁 筑

摩書房 二〇一四年七月)として今日まで文革の影響が尾を引いている旨を述べている。ただ、これには賛否両論がある。

②楊文会は日本の南條文雄(一八四九〜一九二七)との交流で入手困難な仏典を日本から逆将来したり、江蘇省金陵(南京)で刻経處を創立して仏典出版活動に従事したりと、中国における仏典不足の状況に對して基盤事業に着手する等、仏教復興の初期において重要な活動を行っている。

③拙稿「書籍紹介・書評 王恩洋『中国佛教与唯識学』(宝慶講寺叢書)」「『仏教文化』第一六号 二〇〇七年三月)。なお、再掲に際し部分的に改めた箇所がある。

④東初法師『中国佛教近代史』(東初出版社 一九七四年)(東初老人全集一)。

⑤鄭偉宏『漢傳佛教因明研究』(中華書局 二〇〇七年一〇月)。なお、別途機会があれば何れ『漢傳佛教因明研究』を取り上げることには吝かではない。

⑥出版データは、作者張忠義・張曉翔・淮芳、責任編輯陳曉蕊、表紙デザイン春雨彩虹、出版甘肅民族出版社、發行甘肅民族出版社發行部、印刷甘肅天河印刷有限責任公司、書籍の大きさ八八〇mm×一二三〇mm・三二分一(B六判に相当) 印張八、字数二〇万字、版次二〇一〇年二月第一版二〇一〇年二月第一次印刷、定価二八元。なお、本書掲載文(出版当時)に基づき著者の紹介をしておく、張忠義氏は山東省平度出身、燕山大学論理と認知研究所所長。張曉翔氏は山東省臨沂出身、臨沂大学法学院講師。淮芳氏は河北省邢台出身、南開大学哲学院博士課程学生。何れも主要な研究分野は因明研究。

⑦ここでの「漢語」は日本語に借用語として入ってきた中国語の意味というよりも漢字で書かれた文献の意味として日本語で言うところの漢訳や漢文と言う意味合いで使用する。なお現代中国では中国語をさす言葉として「漢語」が使われるが、「漢語」には学術的分野での使用、少数民族に対して漢民族の用

いる言葉及び話し言葉・口語と言うニュアンスがあり、別の言葉「中文」には諸外国語に対する中国語及び文章語・書き言葉のニュアンスがある。更に他に「中国話」もあり、一般的にくだけた意味合いがある。また「普通話」とは広東語・上海語等々の諸方言に対し北京語（北京官話）を基礎とした作られた標準語である。

⑧張曉蕊（責任編輯）、張忠義・淮芳・張曉翔（原稿整理）、張穎（第一章第一節、第二節）、高文（同章第三節）、張敏（第二章第一節）、張忠義（同章玄奘の箇所）、張曉翔（同章窺基、呂才、鳳潭の箇所）、淮芳（同章神泰、慧沼、文軌、智周の箇所）、賈旭・高承珊（同章第三節）、侯玉娟（同章その他）、張敏（第三章第一節、延壽の箇所）、張曉翔（同章王肯堂、真界の箇所）、淮芳（同章明昱の箇所）、張曉翔（第四章第一節）、楊文華（同章楊文会、宋恕、歐陽竟无、章太炎、梁啓超の箇所）、淮芳（同章陳大齊、虞愚、周叔迦の箇所）、侯玉娟（同章その他）、張曉翔（第五章第一節）、刑傑（同章第二節）、張漢生（第六章）の各氏文責によって書かれている。

⑨ここで「日本唯識」を例示しているのは、そもそも因明と内明（唯識）の二明が東アジアでは俱に玄奘漢訳論書によって発展している点から、両者は密接に関係し合っているため内明として唯識を挙げている。

⑩伝承では龍樹と伝えられているが、宇井白寿氏の考証により龍樹以前の小乗論師とする見解に立っている。従来、小乗を奉じる者という説と龍樹に関連する説との二説中、小乗を奉じる者・論師説が認められているが、論法の相似から龍樹伝承説が再評価されつつある。この点については残念ながら本節では触れられていない。

⑪彼は『出三蔵記集』編纂者の僧祐（四四五〜五一八）の下で育てられ、僧祐の仏典目録作りも手伝って

いたと本節において示されている。

- ⑫ 仏典漢訳との関係では、北村彰秀「仏典漢訳史における劉」と文心雕龍」(Web版『翻訳研究への招待』第九号 [http://honyakukenkensyu.sakura.ne.jp/shotai_vol9-kitamura.pdf] 二〇一三年四月)がある。また早くから『出三蔵記集』と『文心雕龍』の類似性の存在する点は指摘されており、興膳宏『文心雕龍』と『出三蔵記集』―その秘められた交渉をめぐって―(『中国の文学理論』筑摩書房 一九八八年九月)、『新版中国の文学本書理論』(中国文学理論研究集成一)清文堂出版 二〇〇八年一月)等がある。ただ、古因明文献の『方便心論』との関係を述べる本節も十分注目に値するものである。ただし『文心雕龍』研究書は戸田浩曉『中國文學論考』(汲古書院 一九八七年七月)、門脇廣文『文心雕龍の研究』(創文社 二〇〇五年三月)等々の通り、文学面からの研究が中心である。
- ⑬ 大正四四卷(一部分現存)。
- ⑭ 散逸。
- ⑮ 散逸。
- ⑯ 散逸。
- ⑰ 『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』卷八(大正五〇・二六三上)。なお、本書原文では経論文の引用はC B E T A 電子佛典(台北)を使用している。
- ⑱ 散逸。
- ⑲ 前後の文脈から「明因」は「因明」の誤植と思われる。
- ⑳ ただし、筆者たちは現物をまだ披見していない旨も述べている。
- ㉑ 本書原文中の「遍是宗法、于同品定有、于異品遍無、是无常等因」の「于」は「於」の意味であるが、

大正蔵経では「性」とあり脚注に「性₁於」（前者は宋元明三本・宮内省本）（後者宮内省本）とある。文脈の意味上は「性」が正しく、「遍是宗法性、同品定有性」と〈因三相〉の二つをさしている。故にここは「此中所作性或動勇無間所發性、遍是宗法性、同品定有性、異品遍無性是無常等因」（大正三二・一一中）となる。なお「異品遍無性」に「性」を付してあるが、上記本書原文では付していない。

②②本書原文では六五〇年誕生説であるが、根無一力「慧沼の研究」（『唯識思想の研究』所収 百華苑 一九八七年七月）による（六四八〜七一四）の年代説に順じることとする。

②③『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』卷八（大正五〇・二六五中）。

②④この四視点は『瑞源記』にも引用しており、本書の鳳潭の記述箇所でも『瑞源記』の重要性を示す例として触れている。

②⑤『破乗章』は本来『大乘法相研神章』内の一章であるが、敢えて並列している。また『分量決』は『唯識分量決』を指すと思われるが、もし『分量決』が他の書ではなく『唯識分量決』であればこれは善珠の著作であるため、おそらく事実誤認の可能性が考えられる。

②⑥現在の中国人による日本仏教研究についての傾向を記したものに、王頌（柳幹康訳）「中国大陆における日本仏教研究の動向」（『日本仏教総合研究』一二号 二〇一四年五月）と林韻柔「台湾における日本仏教研究について」（同上）がある。両編にはそれぞれ附録に「中国大陆地区日本仏教研究文献目録（一九七八〜二〇一三）」と「台湾における日本仏教研究の研究文献目録」が附されている。

②⑦『中日辞典』（小学館・商務印書館 二〇〇三年一月）によれば、事実に基づいて真実を求める、実際に即して正確な方法を見いだす、実際に基づいて正しく行動するという意味。もともと、清代の儒学者たちが思弁的な朱子学に飽き足らず、幅広く歴史学や言語学に裏付けされた考証学を打ち立てるのに用

いた標語であったが、後に毛沢東によって正しい工作方法として高く評価され、文化大革命以後観念的な極左派を追い出すためのスローガンにも使われた政治的意味合いを有す言葉でもある。また『現代漢語大詞典』（上海辞書出版社 二〇〇九年十二月版）によれば、実際の状況に基づき過大・過小にならず正しく対処・処理するとある（評者訳）。ここでは事実に基づいて真実を求めたり、実際に基づく正確な方法・正しく行動するそのような「証真の人」の態度をさしている。

⑳ 原文は「大秦」。これは本来ローマ帝国領やその東方領土の呼称のため、ここではギリシャを含めた西方をさしている。故に西洋と訳しておく。

㉑ 宋立道、舒曉煒訳『佛教邏輯』では「徹尔巴茨基」、姚南強訳「“中国与日本的佛教邏輯”及“西藏和蒙古的佛教邏輯”」では「舍尔巴茨基」と、両書の冒頭音写語が“C h e”・“S h e”で有気音等少々異なっている。

㉒ 本書原文は「中国第三届因明学術研討会」であるが、このみこのような形であり、他では回数次が前に来ているため、ここは誤植と判断して「中国」と「第三届」を前後逆にして訳しておく。

㉓ もともとは一九八三年の全国因明学術研討会開催中の提言による因明研究工作小組（中国論理史研究会「後に中国論理学会中国論理史専門委員会に名称変更」所屬）。所屬者の高齢化に伴い新組織設置。

㉔ 原文は「人際傳播学」。直訳すると、人と人との間に広く伝わることを学問することになり、本文のように訳しておく。

补记（这儿用简体字）

给不熟悉日语的中国研究者一些话。

我认为这本书有五个优点。

1. 21世纪网络对因明传播影响的研究情况。
2. 唐代因明致密的叙述。
3. 关于汉传因明研究成果的课题。
4. 象门户网站一样，信息丰富。
5. 兑的说来汉传因明研究的体系化。